

我れ日本の柱とならん

我れ日本の眼目とならん

我れ日本の大船とらなん

等と誓いし願、破るべからず

日蓮聖人・開目鈔

北

峰



正月号

第4卷 その1

通巻第26号

鷺峰 正月号

目次

卷頭の言葉

鷺峰会の目的とその使命

集 特

日蓮大聖人の足跡をたどる

身延・池上間擊鼓行脚紀行

日蓮大聖人の身延出山の真意 : 日 高 白 象

身延・池上間行脚の目的

編 集

部

身延山より御殿場へ

小 林 白 峰

渡 辺 政 彦

御殿場より池上へ

32 12 10 6

余 錄

広島原爆の地に立つ ······ 仲

清 藏

47

新春九州街頭布教予告 ······

身延山青年行学講習会案内 ······

本妙庵行学研修会案内 ······

編 集 後 記 ······

54 53 53 52

表紙題字 ······ 身延山法主藤井日靜猊下

表紙写真 ······ インド靈鷲山へ渡つた身延山金剛の釈尊像
カット ······ みのぶ教報提供

そ の 使 命

申すまでもなく鷲峰（じゅほう）とは、釈尊が久遠の本仏として八ヶ年のあいだ法華經を說法され、滅後その仏舍利までも留められたインドの靈鷲山のことであり、また我が国では日蓮大聖人みずから「彼の月氏（インド）の靈鷲山とは本朝この身延の嶺なり」と仰せられており通り、大聖人が本仏釈尊の勅使である本化上行菩薩の再誕として九ヶ年のあいだ法華經を讀誦され、滅後その御真骨でも留められた甲州身延山を指すものであり、本仏釈尊留魂の聖地靈鷲山と、上行大聖人留魂の聖地身延山とを同時に意味することによつて、この両山が本来不二一体のものであることを端的に現わしているのです。

法華經本門の經文によれば、本仏釈尊と本化上行菩薩とは久遠劫來、父子一体の関係にあることは余りにも明白であります。されば靈鷲山と身延山もまた本来不二一体の靈山でなければなりません。鷲峰会の目的も使命も、実に此処にあります。インドの靈鷲山と我が国の身延山とを法華經によつて結び、両国両山一体の血脉の中にアジア仏教諸國をはじめ全世界を法華經に開会（かいえ）しつゝ本門の戒壇を建立することにあるのです。

目的と鷲峰会の

然し靈鷲山の現状は、なお荒涼たる岩山にすぎず、身延山もまた僅か五千ヶ寺という小さな日蓮宗々團の總本山にすぎません。此処に靈鷲山を世界の靈山として復興し、身延山を世界の大身延山として興隆せしむる急務があります。それには、この大目的と大使命を遂行するに身命をもかえりみない人材を養成しなければなりません。その場所が身延山中、本妙日臨律師以来、行学二道の伝統をもつ波木井山頂の醒悟園本妙庵であれば幸いです。

時あたかも昨年の春、インド靈鷲山頂に建設される王舍城仏舍利塔の正面本尊として、身延山より金銅の釈尊像が贈られて行きました。ついで大聖人御真筆「注法華經」の影本が同じく身延山より王舍城仏舍利塔々中に奉安さるべき渡印の準備が進められています。時は迫っています。既に仏法僧の三宝の内、仏宝と法寶とがそつてある以上、次には僧宝たる本化青年僧が身延を本として、陸続と西天インドへ擊鼓宣令して行かねばなりません。インドにおいては靈鷲山を本とし、我が国においては身延山を本として擊鼓宣令するところ、兩國両山一体の血脉の中に「本門の戒壇」の涌出することはまさしく「時を待つべきのみ」と申されましよう。

身延・池上間擊鼓行脚紀行

弘安五年九月、大聖人が身延より池上へ向われた道、それは七百年の草に深く埋れて、跡さえ定かならず、遺跡を訪ねる人すら今は少い。醒悟園本妙庵に学ぶ我々鷲峰会学生三名は学校休暇中、擊鼓してその跡をたどつた。或は道に迷い、或は道に誤しながら、この道ぞ祖道復興の道と祈りをこめて……

この行脚紀行の掲載に先き立つて

日蓮大聖人が何故身延を出て

池上へ向わたったのか

まず、その理由をたずねてみよう

日蓮大聖人の

身延出山の真意

日 高 白 象

弘安四年（一二二八年）の七月、博多湾頭に来襲した蒙古の大軍は、一夜の暴風雨のため玄海灘の藻屑と消え、さしもの国難もこゝに去つた。

國民は安堵した。大聖人もはじめて、三間四面の草庵生活を打ち切り、十間四面の本堂建立を許した。同年十一月二十四日、弟子・檀越の丹誠によつて見事本堂が落成した。

大聖人はこの寺に妙法華院久遠寺と命名された。

然し大聖人の御健康は、立教開宗以来三十年間、打ちつづいた法難迫害のため、甚しく害されてい

た。

翌る弘安五年九月八日、大聖人は波木井の領主南部六郎天長公の獻上した栗鹿毛の馬に乗られ、數名の弟子檀越に守られながら、九ヶ年の中、住みなれた身延の山をあとに、故郷房州へと向わたった。

旅の目的は、既に亡くなられた両親のお墓に詣で、かたわら常陸の湯で病状回復を計るものではあつたが、心中ひそかに死期の迫るのを予期されて、父母の墓前に最

後の孝情をのべ、且つは困難後に来る國家状勢の変動をつぶさに見て、正法宣布の対策を未来に立てんとする気構えもあられたことであろう。

この気構えについては、国難後

の政権が、やがて鎌倉より京都へうつることを遠観された大聖人が池上御入滅の眞際、年十四才になる少年経一庵（後の龍華日像上人）に対して、京都開教を御遺命されたことによつても推量されよう

これまで口蓮門下の内に伝えられている大聖人の身延下山、そして関東へ向わたった理由としては、

御両親のお墓詣でと、常陸での湯治（そこは加賀井温泉ではなかつ

たかとも言われているが）、それともう一つの大変な理由として、——身延よりウシトラに当る池上の地を死に場所と定めるため——

ということが挙げられているが然し、そのいずれにしても個人的な理由にしかすぎない。

思えば大聖人の身延入山は、個人的な隠棲ではなく、有史以来未曾有の大困難が眼前に迫り、しかも最後の国家諫諍にも入れられなかつたものであつたればこそ、最早この困難を一身に背負つて仏天に祈るほかはなく入山された、國家的見地に立つものであつた。

また在山九ヶ年の間、則ち弘安四年の第二の蒙古襲来の終るまで

は、たとえ入山三年目の建治二年三月十六日、恩師道善坊が清澄山で遷化されることが起つた時でも——急ぎ身延の山を走り出で、火をくぐり水をくぐつてとも、恩師の墓前に到り、報恩のお経の一巻をあげたもの……

と、心ははやりながらも、敢てその心をおさえて、一步も身延の山より出なかつた所以のものも、——大惡は大善の来る前兆……

として、大惡難終結の後に、いよいよ大善法華経が広宣流布する時が来る、という國家的見地に立つていたからである。

在山九ヶ年の中、八ヶ年もの間

のよくな、三間四間という手狭な草庵に起居されていたのも、ひとえにこのためであつた大聖人が、親のお墓に詣でるためとはいえ、或は御自身の病氣湯治とか、死地を定めるためとはいえ、そうした個人的理由で身延を出られるはずはあり得ない。

そこには必ず、国家的見地からみる重大な理由が、秘められてゐなければならない。

九月八日 下山

(山梨県南巨摩郡身延町下山本

国寺——下山光基邸趾)

九月九日 大井莊

(山梨県南巨摩郡鐵沢町蓮華寺
蓮久寺——大井橋六邸趾)

九月十日 曾根

ておればこそ、門下の人々に滅後の方策をさすけておく、という方針であつたのではないか、と推量するほかはない。

おそらく大聖人は、こうした重大目的を胸中に秘して、身延を出されたことであろう。

池上への道中、宿泊された所は古い記録に次のように記されている。

(山梨県東八代郡中道町上曾根

九月十六日 平塚

妙石庵——曾根治郎正晴邸趾)

(神奈川県平塚市平塚町要法寺

九月十一日 黒駒

長谷川邸趾)

（山梨県東八代郡御坂町下黒駒
岩間宣計宅）

九月十二日 河口

（山梨県南都留郡川口湖町——
波江因幡上ノ坊——梅屋宅趾）

九月十三日 吳地

（山梨県南都留郡西桂町上吳地
——遠山藤学邸趾）

九月十四日 竹ノ下

（静岡県駿東郡小山町竹ノ下常

唱院——鈴木繁八邸趾）

九月十五日 関本

（神奈川県足柄郡南足柄町雨坪

弘行寺一下田五郎左衛門邸趾）

上の邸には午の刻（午後一時）に到着されている。

その旅程は、前後十一日間も要しているが、それは文永十一年五月十二日鎌倉を発つて同十七日身延に到着された身延入山の折の、前後六日間の日数にくらぶれば、およそ倍もかゝつている。

それは、おそらく大聖人の御健康が著しくそこなわれていたためであろう。

過ぎて足柄峠を越え、小田原の上流の関本より酒匂川を渡り、松田・秦野を過ぎ、平塚、瀬谷を通つて、多摩川の丸子の渡しで、池上宗仲兄弟をはじめ鎌倉在住の一門に迎えられ、洗足池を経て、池

めで最後に判形といつて書判をし

ためようとされながらも、その力すらなく、

所勞の間

判形を加えず候こと

恐れ入り候

と口述代筆せしめておられるほど衰弱されていた。そして、それより一月もたない弘安五年十月十三日の午前八時頃、大聖人は池上の邸において御入滅されたのであるが、それほど衰弱しておられるお体でありながら、敢て身延山を出て関東へ向われた大聖人の心中を思えば、困難後の日本國の行く末を憂う大聖人の、護法憂國の至情が、ひしひと胸に迫り来るのを禁することは出来ない。

池上行脚の目的

編集部

目下、波木井山頂の醒悟園本妙庵には、日高白象上人を中心として、昭和三十九年の春身延山大学

田君や浅見君の來園しない昨年の六月の頃、

を卒業した鷺峰第一期生の沢田覚象君（京都府出身）、同第二期生

「今度の暑中休暇には、大聖人が池上へ向われた弘安五年の聖路をたどつて擊鼓行脚しよう」

の小林白峰君（福島県出身）をはじめ身延山大学一年の渡辺政彦君

と申しあわせた。

その目的の第一は、大聖人の足跡をたどることによつて、祖道復興につらなるということ。第二には、その道を歩かれた時の大聖人の心底にふれるということ。そして第三には、七百年前の聖路が、

深く草に埋れ、今や忘れ去られようとしている今日、出来る限り史

実に忠実に歩くことによつて、道順を明かにすると共に、道中の遺蹟をさぐり、これを顕彰する一役をもにならうということであつた。

もちろん道中には、幾多の苦難が予想された。然し、苦難こそ買つても出るべき修行である。

思えば身延山学生布教別動隊が今日全国各地に街頭布教を展開しては、大いなる成果をあげているが、その起りといふものは、昭和三十七年の夏、数名の学生有志が日高上人と共に、身延より鎌倉へ所謂文永十一年五月大聖人が身延入山された聖路、これを逆にたど

つて、更に池上から東京まで行脚し通したことにつづいている。

爾来、別動隊は休暇ごとに休暇を返上し、街頭に擊鼓宣伝、民衆に獅子吼して、その布教は誠に華

華しかつた。

然し氷山にしても、洋上の部分の何十倍のものが、水中に深くかくされている。

我々は決行を決意するや、直ちに準備にかゝつた。準備の第一は

大聖人の歩かれた道を、出来る限り忠実に歩くため、そのコースを確認しておくことだつた。

五万分の一の地図をひろげては研究した資料にもとづいて、コースに赤線を入れて行つた。

会のみならず、過去幾度か行われたと伝え聞いている。

然し、弘安五年の池上への聖路をたどる行脚を試みた話しへ、絶えて聞いたこともない。

分の一しか入らなかつた。何とな

れば、聖路を裏付ける資料は少く

不明の点が多かつたゝめである。

——かくなる上は、現地に到つて

踏査するほかはない——

と思つてゐる中、暑中休暇がや
つて來た。身延山布教本隊は直ち

に京都、大阪へと出動し、つい

て別動隊は名古屋、瀬戸、小牧、

一ノ宮、津島、七宝方面へと速日

街頭布教を展開した。身延に帰山

したのは七月二十三日の夜のこと

だつた。我々もその中の一員だつ

た。

本妙庵に帰つて、一週間に亘つ

た関西、中京地区布教の疲れをい

やすと共に、海上行脚コースの最

終的机上復習を試みた。これには

遂についたのである。

二日もかゝつた。

そして七月二十六日いよ／＼社

以下、日程に従つて、行脚の記
録を紹介してみよう。

身延山より御殿場へ

小林白峰

七月二十六日 晴

黎明、祖廟にぬかづき、行脚の

所願成就に暫し祈念をこらし、本

山へ登つて、法主猊下をはじめ山

務役職員に挨拶。激励をうけて山

門を出発したのは、早くも九時を

すぎていた。

一行はわずかに三名。太鼓は三

尺三の太鼓を擊つて、本妙庵を出

発したのが夜明け前。

本。然し擁護の仏天、我が頭上にありと思えば、決して淋しくも心細くもなかつた。

門前の人々の盛んな見送りをうけ、東谷から田中州街道に入った



租庸より出発する行脚隊

新宿（しんしゆく）の部落をする頃、清正公堂があり、こゝより遙かに本妙庵の台地、禪定窟の森をおがみ、間もなく「旭の御祖師さま」というお堂の前に出た。こゝは文永十一年六月十七日、大聖人が波木井の城を未明に出て西谷の御草庵へ向われる途中、東天に旭の昇るのをおがまれた所と伝えられ、内陣の祖師像は、珍らしくも立像で勧請されていた。

あたりには大きな枝垂桜や老松がそびえ立ち、無住のお堂の人気もない境内には、鳴くセミの声ばかりがまびすしく、神氣のたゞようものさえ感ぜられた。

この街道は県道に編入され、近くの山に因幡房が最蓮房に遙近し、光基の子に四郎という子がいた長じて出家し、因幡（いんば）房と称し、比叡山に遊学中、最蓮房と親交があつた。

く幅六メートル五十のバス道路となり、身延の裏参道として発展する予定であるというが、今は人気もないこの街道をたどり、一里松杉山の部落を経て国道に出、下山町の本国寺に詣でた。

こゝは下山の領主、下山兵庫五郎光基のいた所である。文応元年夏の頃、領内に疫病が流行したため光基は、邸のそばに平泉寺を建立、かねて信仰していた阿弥陀仏を勧請し、除厄の本尊とした。

た時、既に最蓮房は大聖人の門弟となつており、旧交を温むる間、因幡房は法華經の本義をさとされ

直ちに身延山西谷の草庵に大聖人をたずね、爾來、念佛をして、法華經に帰依し、お題目を高唱するようになつた。

父光基はこれをなじつた。因幡房は大聖人にこの旨を計つた。そこで因幡房に代つて大聖人みずから一書を譲り、光基に呈して捨邪帰正の本義を開陳せしめた。所謂「下山陳狀」または「下山御書」というのが則ちそれである。

光基は、この書によつて豁然大悟し、巍然として旧執をすて、法華經に帰依し、受戒して法重房日

芳という法号をさすかり、同時に因幡房も日永という名をたまわつた。

同時に平泉寺が本国寺と改称して、法華の道場となつたのはいうまでもないが、時に建治三年六月のことだつたといふ。

寺宝としては山梨県文化財に指定された磬（けい）とか、大聖人が最蓮房へ与えられたと言ひ伝えられると、詮法華經を、身延十五代宝蔵院日叙上人が書写されたものとか、同広中師が書かれた数点のもの等々が格護されていた。

最蓮房日淨上人については、歴

史的に実在したかどうか、学説区々としているが、本国寺では開山

とて仰がれており、伝えるところでは最蓮房が、その晩年、本国寺に起居して、身延の大聖人に師事したともいわれている。

最蓮房に関する史実については更に研究を要するものが多いが、然し弘安五年九月八日、関東へ向われる大聖人が、身延出立の第一夜を光基の邸で過された、ということは確かなところである。

おそらく大聖人は、日も明い中に到着され、光基に乞われるまゝに法門のことを説き明かされるまゝいつ時のたつのも忘れて、一泊されるに至つたのであろう。

なお下山の靈場上沢寺の古記録によれば、光基の邸は今城山と

いう台地にあつたらしく、大型人は恐らく、その城山に一泊されたのではあるまいか、という説もある。

住職は身延山大学教授の秋山智孝先生。恩師であるだけに心安く

これよりたどる大聖人の池上聖路について、種々御指導をうけた。

それによれば、大聖人の歩かれた道は、今の国道筋ではなく、本

道院といふお寺のところで、二手に分れる道を右にとり、上粟倉と

粟倉の部落をすぎて、国道の早川橋へおりるコース、ということだつた。

道幅は三尺ばかりの、稀にキコ

りしか通らない草深い山道、

「判りにくいだろうから……」

と、わざわざ一人の信者を案内

にしてくれた。おかげで道に迷

うことなく、粟倉部落へついた

のは午後の二時半。

宗光寺という日連宗寺院に参拝し、部落をすぎて遅い中食をとりけわしい下り坂をおり切ったところが、七面山参拝の折に通りつけた早川橋のすぐそばだった。

早川橋を渡ると、橋のたもとで

道は二つに分れる。右は甲府へ行く国道、左は早川の川ぞいに上る九尺道路、旧道はこの山道である

山道は、ほどなく早川の河淵よ

ざわ）、中山、矢細工（やざいく

）、川平、平須（ひらす）、久成

（くなり）、大塙、鳥屋、雨久保

狩宿、仙洞田という山間の小部落

を糸のように縫つて、小室（こむろ）山妙法寺に達している。

日蓮大聖人が歩かれた道も、おそらくこの旧道であろう。そして大聖人を毒殺しようとした小室の修驗者善智法印もまた、この道をつたつて身延へ行つたことであろう。

我々一行は、この山道をめざして、そして夜遅くなつても小室山まで、たどりつきたいと思つた。

中山部落に入つたのは午後三時すぎ。こゝから道は六尺にせばまつ

た。この道は「矢細工には大

聖人の遺跡はないのではないか」

と村人から聞かされて、つい迷

いが起つた。その上、矢細工は次

の川平部落へ行くのに遠廻りにな

つており、一方には直接中山と川

平を結ぶ遠間峠があり、その下を

くりぬいた隧道の近道がある。こ

の道も随分古い道という。

へいすれが大聖人の歩かれた道な

のか？

我々は迷いながらも、近道の隧

道への道を選んだ。

こうした山道では、通る人の影
すら稀である。三人の擊つ太鼓の
響きのみが、空しく山から山へ、

明朝早く出発するようにな……」

とすゝめられ、旅装をといて温

い歓待に旅の疲れを休めた。

行脚の第一夜である。然し、初

日から予定通り歩けなかつたこと

谷から谷へとこだまするばかり。

心細い思いで川平部落につくと

「少し山を下つた夜子沢（よこざ

わ）部落に日蓮宗のお寺がある」

と聞かされて、闇夜に灯台の灯

を見出したような思いがした。

午後五時、夜子沢の部落へ入つ

た。お寺は妙向寺という、身延山

布教部に勤務している秋山上人の

お寺だつた。大学の先輩でもある

「これから小室山へ行くのは大へ

んだから、今日はこゝに泊つて、

道をおさう草のため、方向さえ判

らなくなつてしまつた。

朝八時、やつとの思いで平須と

いう部落に入った。こゝには妙光

寺と長遠寺という二軒の日蓮宗寺

院があつたが、いずれも無住。

村人に聞けば、

「二軒とも今より五百年ばかり前

……そういう気持が拭い切れなか
つた。

九月二十七日 晴

△今日こそは、昨日の分をとりも

どそう。

と意氣込んだ。秋山上人のお母

さんが旧道の入口まで案内された

道は二尺幅のけわしい山道、途中

道をおさう草のため、方向さえ判

らなくなつてしまつた。

真言宗から改宗したお寺で、曾つては立派なものだつた」

ということだつたが、こういう山間では、お寺の生計も成り立たないのだろう。主なきお寺の境内は、一面雜草におよわれていた。

なお長遠寺の本堂の脇にある小さなお堂の須弥壇の下には、昔から黒蟻の大群が巣を作り、巨大な蟻の塔が出来ていた。天然記念物に指定されているというが、信仰

上からみれば、どうということになるのだろうか。ともかく無気味なほど物凄い蟻の大群だつた。平須から久成へ向う途中、一行の渡辺君が激しい腹痛を訴えはじめた。三人とも足は豆だらけ。血

豆である。汗とほこりにまみれた三人は、互にいたわりあい、励ましあつて歩きつゝけた。

午前九時四十分、久成に到着。

こゝには円妙寺と寂遠寺という二軒の日蓮宗のお寺があつた。こうした山間の小部落ごとに、二軒・三軒と日蓮宗の寺院のあることこ

そ、昔の旧道を物語り、曾つて大聖人が歩かれ、教化された面影を留めるものであろう。

「遭難することはないにしても、道は迷いやすいし、一度迷つたらなか／＼本道へ出られない」と聞くと、山奥の大塙部落に妙

伝寺・薬王寺・法永寺・仙應寺といふ四軒の日蓮宗寺院があり、地図の上の道筋からみても、

——大聖人の通られたのは、おそらく大塙への道だう——

とは考へられても、ついひるん

案内なしでは、とても歩かれたものではない。

それに大聖人が通られたかどうか……そういう話しさ聞いたこと

か……そういう話しさ聞いたこともない」

でしまつて、国道筋の石切という町へ下つてしまつた。

石切は夜子沢から下つて来た道

とも一緒になるところである。結

局、我々は平須・久成と山の中を廻り道をしたことになるわけであるが、行脚の終つたあとでも、

△あの時、勇気を出して大塙へ歩

いておけばよかつたのに……▽

と後悔されてならなかつた。

人生には必ず分れ道がある。一

つはげわしい道、一つはやさしい

道。この時、凡夫は、心ではけわ

しい道を進むべきだと思つても、

しまいがちである。

人生の岐路に立つた時、たとえ

迷つても、けわしい方の道を進むのが、勇者の道であり、成功の道ではなかろうか。

切石には善妙寺と正伝寺とい

日蓮宗のお寺があつた。曾つて善

妙寺の境内には「日蓮大聖人御手植の木」と伝えられる老松があつたといふ。

この大木は最近倒れたゝめ、こ

れを削つて、記念の宝塔が建てられてゐた。

こゝで中食をとつたが、善妙寺

に大聖人の御手植の松があつたこ

とが事実とすれば、大聖人は石切

を御通されたことにならうか。

△石切へ下つたことが、ケガの功

名であつてくれゝばいが……▽

と語りつゝ、それより富士川に

そう国道を、鰐沢へと急いだ。

午後の太陽は容赦なく照りつけ

た。国道は舗装されておらず、切

り碎かれた砂利が、道一杯にひろげられているため、足裏の豆は、刻々に数を増し、刻々に大きくなつて行つた。

行き交う車が、砂塵とハイキガスをまきあげ、息もつきにくくにに撃つ太鼓の音さえ、ガン／＼頭にひびき返つた。

午後四時、やつとの思いで鰐沢の町に入つた。ウナギの寝床のような町であるが、こゝには蓮久寺と蓮華寺という寺院があつた。

蓮久寺には六老僧白蓮阿闍梨日

興上人の、慈母に抱かれた幼少の頃の本像が安置されており、蓮華寺の境内には、日興上人生誕の地を記念した大きな記念碑が建つていた。



鍔沢蓮華寺境内の日興上人生誕
記念碑前における住職と行脚隊

両寺は約三丁ばかり離れてはいるが、皆は大井ノ荘の領主、大井橋六（きつろく）の邸内であった。日興上人は橋六の子として寛元四年三月二日ここで生れた。幼少の頃、父に死別し、母が武藏の綱島家に再嫁したため、母の実家の駿州河合の由比氏に引きとられ、長じて岩本の実相寺に出家。正元元年大聖人が実相寺に来つて一切経を閲読中、大聖人の弟子となり後年、父方と母方の縁故をよりどころとして、甲駿両国にかけて大いに教説を拡張した。

弘安五年九月九日、池上へ向わられる大聖人が、一泊された大井ノ荘とは、日興上人の父方の館であつたことはいうまでもない。

なお蓮華寺の開山は、日興上人の肉弟である寂日房日華上人。このため寺は、開山以来十五代までの富士門流に属し、後に日蓮宗に転宗して現在二十二代とのことだつた。

によつて法師は心より改悔し、爾來、厚く法華經を信する一方、大聖人の寿命の一日も長からんことを祈つて祖像をきざみ、大聖人の開眼をうけて、青柳の里に一字が建立されるや、肉弟の昌福阿闍梨日全上人を開山として住せしめたと。いう。

なお善智法印は大聖人より惠頂阿闍梨日伝という法号をさすかり後に中老僧の中の一人と仰がれ、建武二年二月十二日遷化している。今の住職は身延山布教部長岩間満良上人、あいにく不在であつたが、お嬢さんたちの温い接待をうけ、これより道を引き返して小室山へ向つた。

この時、法印は法力をもつて、

小室山妙法寺は日蓮宗の本山である。貫首は笠津海學上人。到着したのは午後七時半。日はとつぶり暮れていた。

この伝説は、如何にも紛飾された幼稚な宗教劇としか現代人には受けとられないかも知れない。

この大盤石を空中高く浮かせた。これに対しても大聖人は、法力をもつて空中の大盤石を、地に降させなかつたという。

この伝説は、如何にも紛飾された幼稚な宗教劇としか現代人には受けとられないかも知れない。

然し、歐米における靈研究では、靈媒者が念ずる中に、何トンもあるような物体が、空中に浮き上ることを、科学者の立ちあいのもとで屢々実験されている。

そういうことを思いあわせるとこの法力くらべの伝説も、あながき否定出来がたいものがありはしまいか。

ながら、再び飯沢の町を通り、富士川を渡り、身延線の鉄道を越えて、市川大門町高田の長生寺に到了つた。

長生寺の住職は、身延山大学教頭松木本興先生。先生の説明によれば、

「大聖人が曾根へ向われた道は、

現在の川ぞいの県道ではなく、そ

の上の台地の中の旧道である」

ということだつた。おそらく山間の小部落を縫う小道であわう。

先生の説明を聞く中、河から吹き上げて来る風が涼しかつた。長

生寺の裏あたりで、笛吹川と釜無川が合流して、こゝから富士川が始まつてゐる。

こうした地形にもよるのであるが、市川大門町の山手の三珠町という台地が、甲斐源氏の発生の地といわれている。

また余談であるが、天下の名僧團十郎が市川の姓を名乗つたのも彼が市川大門町の出身であつたからだという。

先生に見送られて曾根へ行く途

中、流通寺に参拝した。こゝは身延山の祖廟輪番本部に勧請されている田中静光上人のお寺。境内には天然記念物に指定された白樺の大樹が青々と繁つていた。

なお聞くところによれば境内には、柿の実の内に、また柿の実が結ぶ「二重柿」という、珍らしい

柿の木があつて、天然記念物として申請するよう、県から要望されているという。

これより大聖人が一泊された上曾根へと急いだが、水筒の水はたちまち無くなり、滑道にはカゲロウが立ちのぼつていて、まるでホウロクにいられるような暑さだつた。

底の薄い白の地下足袋の下からは、焼けた小石が否応なしに食い入り、足裏の血豆は煮たつて、△これは地獄の苦しみか△

とさえ思われた。

午後五時、上曾根の部落へ入つた。さつそく村人に大聖人の遺蹟をたずねると、

「妙石庵の庭に、大聖人の高座石
がある」

と教わつた。

行つてみると道ばたに、それらしき岩があつたが標識もなく、妙石庵とは名ばかりの堀立小屋で、誰も住んでいる様子でもなかつた

隣家の人にたずねると、

「ずっと以前から何処かへ引越されて行方は判らない。大聖人のことなら袈裟掛の松の家で聞いて御覧」

と言われた。

袈裟掛の松の家、それはワラブキの黒ずんだ古い民家だつた。大聖人が袈裟をかけられたという松の大木は、庭一杯に見事な枝を張

ついた。

案内を乞うと、一人の老婆が出

て來た。家人は他に見当らなかつた。聞くところによれば、この家こそ大聖人が弘安五年九月十日、池上へ向われる途中、曾根で一泊された家だといふ。

なお老婆の語る当家の由緒は、

およそ次の如くであつた。

この家は、明治七年の戸籍改正の折、上曾根の大字堀ノ内という地名によつて「堀内」と姓を改めるまでは、代々「曾根」の姓を名乗つていたといふ。

今を去る五十一代の頃、曾根家より二丁ばかり離れた道端の、巨石（後の高座石）の上に坐つて、

村人に説法する一人の若い旅僧がいた。

夜になつても去らないので、曾根家に案内すると、終夜家族の者に対して法華經を説き、たまく畠裏に自在鉤のないのを見て、手すから一個の齋を刻み、その使用法を教えて、朝の明け方、漂然として何処となく旅立つて行つた。越えて文永年間、曾つての旅僧が弟子二・三をつれて再び来訪し、みずから「日蓮」と名乗つて、曾根家を宿とし、高座石で説法すること一週間、その間、曾根家の菩提寺である龍華院に法論を挑んだ然し龍華院の住職は、病気を理由として応じなかつたといふ。

たまく、曾根家では、新築の家が落成した。大聖人はみずから上棟式に臨まれ、火難・盜難除けの棟札をしたゝめられ、次いで棟木にも経文を写された。

爾来、七百年、曾根家では一度も災難にあつたことがないという今日、家が黒ずんでいるのも、そのせいであるかも知れない。

当時、曾根家の当主は曾根治臣正晴。正晴に二人の弟がいた。一人を伝内といふ、その妻を政といつた。政は久しく産褥に悩んでいた。

夫婦して弟子となり、伝内は妙伝政は日円という号をさすかつた。後年、大聖人の佐渡流配中、妙伝は、はるゝ佐渡に大聖人をたずねて御本尊を授与せられ、妻の日円もまた、江戸に一字を建立して報恩にそなえた。今の堀ノ内の日円山妙法寺がそれであるという。また当主の治郎正晴も御本尊の授与をうけ、後年高座石のそばに一字を建立、大聖人の尊像を安置して妙石庵と称した。

越えて弘安五年九月十日、池上へ向われる大聖人の一行が曾根家に一泊。この時、大聖人が紙包みを取り出し、「我が病い、目出度く平癒したな」と、靈験たちどころにあらわれると、靈験たちどころにあらわれらば、また会うこともある。若し我が亡きあとは、これを我が魂のこもれるものとして、大切に格護せよ」

と手渡された。この紙包の内のこと、大聖人が九ヶ年の間、身延山中で御使用になられた法華経十巻の経巻であつたという。

このほか家宝として「水止のお経石」「子さすけ安産の子持石」ならびに大聖人一泊の折、御使用された茶椀などが秘蔵され、御使用の箸は祖母の代まであつたといふ。

老婆の語る曾根家の由緒と家宝は、大体以上の如くであつたが、宝物は悉く箱にしまわれ、或は紙

に包まれたまゝ、

「開けば目がつぶれる」

という言い伝えによつて、内を

拝観することは出来なかつた。

このため眞偽のはどは論するこ

とも出来ないが、曾根家が甲斐源

氏の発生地に近く、また曾根氏が

甲斐源氏の中の豪族であつたこと

は歴史的なことなので、大聖人が

弘安五年九月十日一泊された曾根

の宿も、この家であつたことは疑

われないとところであろう。

既に日はとぶり暮れていた。

実は、

△今夜、曾根家に一泊させてもら

いたい△

と思つていたのだが、

「これから、どちらに行かれます
か」

と老婆に聞かれて、

「いや泊めてもらいたいのです」

と言ひ返す心臓の持ちあわせも

なく、

△曾根家の由緒や家宝については

後日、専門的に研究する余地があ

る。何時かは、きつと調べさせて

もらおう△

と、心に期して外へ出た。

さて、外へ出たものゝ泊るあて

はない。大聖人が次に泊られた所

は黒駒。地図の上でみれば、

△上曾根から石橋・御所・岡。

竹居・大野寺という部落を経て下

黒駒へと、山の麓を縫つて行く△

ースが、おそらく大聖人の歩かれ
た道であろう――

とは思われながらも、夜分、人

も通らない山道を、しかも初めて
歩くとなれば、却つて道に迷つて
しまう。

そこで、コースは少しそれるが

笛吹川ぞいの県道を、石和（いさ

わ）の町へと向つた。石和には大

聖人の靈場として有名な鶴岡山遠

妙寺がある。

一行の足は、悲しいほど重かつ

た。腹はペコく。荷物が肩にく

いこみ、撃つ太鼓さえ急に重くな

つた。

夜十時半、石和の町へ入り、夕
飯代りのパンを買い、遠妙寺の門

前に立つたのは、既に十一時に近かつた。

あまり遅いので、庫裡へ声もかけず、本堂の軒下の廊下にゴロ寝して、パンをかじつた。

夜空を仰ぎながら一人が言つた
「大聖人もつらかつただろうネ。

御病氣だつたから……」

間もなく、泥のような眠りにおちた。

このお寺は、平家の落武者・平大納言時忠が、鶴飼勘作といふ漁師に身をやつして生計を立てる中孝養のためとはいえ、禁漁を犯して処刑され、その靈の浮ばれなかつたところを、文永十一年五月の末、大聖人甲州巡録の砌り、みず

から法華經一部八卷二十八品、六万九千三百八十四文字を河原の一

字一石にしたゝめ、河底に沈めて川施餓鬼供養をいとなんだ功德によつて、はじめて成仏得脱するこ

とが出来たという由緒によつて建

てられたもの。

この物語りは歌舞伎や人形淨瑠璃にも上演されており、その時の一字一石の一つといふ「諱」の字をしたゝめた石が、今なお伊豆玉沢の妙法華寺の宝蔵に保存されている。

笛吹川を渡る頃、太陽がアスフ

アルトに照り返して燃えるような暑さとなつた。沿道には、色よく

実つた桃の畠が、果しなくつゝく遠妙寺の山門前には、

「宗門川施餓鬼根本道場」

という碑が高々と建てられて

た。

七月二十九日 晴

早朝、遠妙寺住職長沢順論上人が、朝のお勤めのため本堂へ来られた時、我々の姿を見て驚き、

「昨夜、一こと声をかけてくれ、はよかつたのに……」

と同情されたり励まされたり；

「それに勇を鼓舞して国道を黒駒へと急いだ。

笛吹川を渡る頃、太陽がアスフルトに照り返して燃えるような暑さとなつた。沿道には、色よく実つた桃の畠が、果しなくつゝく聖人の遺跡をたずね〜て、岩間宣計氏の家に至つた。

その家の庭さきには、道端に面して、

「日蓮大菩薩御腰掛石」

と刻まれた碑が一基建つており

その下に、それらしい古い岩があつた。

記録によれば大聖人は弘安五年

九月十一日、黒駒に一泊されたこ

とになつてゐるし、下黒駒、上黒

駒を通じて大聖人の遺跡は、ここ

にしかないとすると、一泊された

民家も、おそらく岩間氏の家であつたのだろう。

氏の語るところによれば、

「大聖人は岩間家の御供養に対し

て、フジヅルで大マンダラをした

ゝめられて授与された。

然し、この大マンダラは何時の頃、どうしたわけか、同じ下黒駒の臨済宗建長寺というお寺へ渡り

いもそのお寺に格護されている、

と言ひ伝えられている」

ということだつた。この時、

へついでに建長寺まで行つてみよ

うか』

という説も出たが、いずれ曾根

の資料も改めて調査する必要があ

るので、

△研究は次の機会にしよう△

といふことで、その日は名産の

桃を御馳走になつたまゝ、先きを

急いた。

下黒駒の町の出はずれにさしか

として名高い「黒駒の勝蔵」を顕彰した高さ一丈ばかり石碑が建つていた。

これより御坂峠への道となる。

昔は鎌倉街道ともいわれていたそ

うだ。上黒駒の町をすぎて間もなく、十郎橋という部落があつた。

街道を横切る金川という川には、

十郎橋という高い橋がかゝつてい

た。

聞いてみると、その昔、蘇我五

郎、十郎の兄弟が、十八年間の辛

苦の後、建久四年五月、富士の裾野の狩場で、父河津祐泰のかたき

工藤祐経を討ち果し、この川の流れで血刀を洗つたのだという。

やがて一行は藤野木という所へ

來た。こゝには昔、駒木戸関があつて、口留番所のきびしいサクがあつたといふ。今はその跡もみられないが、左右の山が屏風のようになつていて、道もいよいよ急になつて来る。

午後一時二十分、御坂峠の麓の御坂町につき、茶屋で旧道を聞き国道と別れて、キヨリしか通らぬ右側の細い道へ入つた。

やがて旧道が二つに分れた。一行は左へ道を取つた。これが間違いのもとだつた。本当の旧道は右側だつたのだ。

そうとは知らず、グン／＼道坂を進む中、道らしい道はなくなつてしまつた。

「山で道に迷つたら尾根へ出よ」という諺を思い出し、物凄い傾斜の崖を、三人とも四つばいになつて、よじ登つた。下をみれば千仞の谷底、氣味が悪いやら、心細いやら……やつとの思いで尾根へ出ると、天の助けか山師に出あつた。

さすがに山師もギョツとした。

無理もない。こんな山の中で、何世紀も前の、墨染の衣に手甲脚絆をつけ、綱代笠をかぶつた三人の坊主に、ふいに出あえれば、驚かない方がどうかしている。

△大聖人もこの富士を仰がれた。我々も今も、この富士を仰いでいる。今も昔も富士の峰には変りはない。然し七百年の昔、御坂峠を越えられた時の、大聖人の御難辛は如何ばかりであつたろうか？

るぐらいの、ひどい目にあつたかも知れない。

ところが折角おしえてもらつた道も、また間違え、行きつ戻りつしながら、やつと御坂峠の山頂についたのは午後五時三十分。

ホソト一息ついて眺める富士の巣峰は、夕陽に照りはえて素晴しかつた。こゝは海拔二五二五メートル、甲州富士見三景の一つに数えられている。

△大聖人もこの富士を仰がれた。我々も今も、この富士を仰いでいる。今も昔も富士の峰には変りはない。然し七百年の昔、御坂峠を越えられた時の、大聖人の御難辛は如何ばかりであつたろうか？

と、我が身の苦労をかえりみて

いたという。

そう思はずにはおられなかつた。

△では梅屋は、今どうなつてゐる

峠より麓へ下るのは一息である

か？

我々は道を急いだ。太鼓も強く
撃ちつけた。法警は山から山へ
とこだまして、遠く富士の峰へと
流れて行つた。

午後六時四十分、河口湖畔につ
き、河口湖町へ入つたのは夜八時
この町には大聖人が池上へ赴か
れる時、則ち弘安五年九月十二日
一泊されている。

その家は、大正の頃の蟹沢氏の

調査の結果にもとづくと、浅間神

社の社家十二ヶ坊の一つである渋

江因幡上ノ房で、上ノ房は後に梅

屋と称して明治時代までつゞいて

して参拝したことのある懐しいお

寺。到着した時は、もう九時をす

ぎていた。

その後おそらくまで、住職上人を
囲んで、弘安五年九月、大聖人が
池上へ向われた時のコースについ
て、色々と御指導を仰いだ。

古い記録によれば大聖人は、九
月十三日、富士吉田より指呼の間
にある身延別院上行寺に電話をか
け、今夜の宿泊をお願いした。突
然のことではあつたが、住職上人
は快諾された。

また別の記録によれば、吳地一
泊の宿は遠山藤学の邸であつた、
とも記されている。

然し、これを裏付けるものは當

地には見当らないということだつ

たが、

「最近になつて、上吳地の町の志
村家から、三位（さんみ）日順の
通行手形が発見された」

と言われた住職上人の言葉は重
大だつた。

三位日順上人といえど六老僧日
興上人の、弟子の中の逸材であり
北山本門寺内の重須（おもす）談
所の、大学頭までつとめたほどの
学匠であつた。

これほどの学匠が、何時の頃で
あつたとしても、上吳地の志村家
に通行手形を残したとすれば、そ
れはおそらく日順上人が、大聖人
一泊の遺跡を慕つて來ることゝ當
然うなずかることであるから、
この手形を頼りにたどつて行けば

或は志村家から遠山藤宇邸へと通
じ、大聖人一泊の遺跡も探し出さ
れるかも知れない。

それにしても富士吉田には、富
士山信仰の講元をしていた塙谷平

左衛門という人が、文永六年の頃よ
り大聖人の篤信者となつてゐるの
であるから、本来ならば大聖人は
吳地に泊らず、吉田の塙谷邸に泊
るべきではなかつたか。

それにもかゝわらず、吳地に一

泊されたのにについては、吳地に新
しい篤信者が出来ていて、その人
から敢て招待されたのか。

或は、その招待にあわせて上吳

地が、三国峠への登山口とつてい
たゝめであろうか。

早朝、上行寺住職上人の車で、
七月三十日 晴

然し、コースを中心にして考え
るならば、三国峠のコースよりも
籠坂峠のコースの方が開けており
当時の鎌倉街道も籠坂峠を越えて
いる。

△何故、大聖人は吉田に泊らず、
吳地に泊られたのか。その遺跡は
何処にあるのか？

△大聖人が吳地よりたどられた道
は、三国峠の道なのか、籠坂峠の
道なのか？

以上のようなことを討議する中
結論を得ないまゝ、はや時刻は夜
中の十二時をすぎていた。

河口湖畔大嵐の蓮華寺に、八須口
葛上人を訪ねた。

それは身延出発に際して、八須
上人を訪問するよう言われていた
からである。

七時、蓮華寺到着。八須上人も
鶴首されていた。上人は創価学会
折伏のベテランであり、このため
全国を行脚された尊い体験の持主
でもある。

蓮華寺で朝食の供養を受けながら、
八須上人より行脚の心得を種々
教示して頂き、それから一旦上
行寺へ引き返し、三人の豆だらけ
になつた足裏を治療して頂くため
再び上行寺住職上人の車で、宿家
である坂本照正さんの家へ向つた

家は山中湖畔の、山中湖村にあ
つた。坂本さんは、これからの長
い道中のため、少々手荒く徹底的
に治療された。

山中湖村は、三国峠への道と、
籠坂峠への道との分岐点になつて
いる。どちらの道を行くべきか、
こゝが思案のしどころだつた。

決め手は、今夜の宿が御殿場の
仏舍利塔。それえ行くには、籠坂
峠を越す方が、道も近い。それに
この道が旧道倉街道。

時に午時十一時、上人や坂本さ
んの家族と別れを惜み、籠坂峠へ
の一歩を踏み出した。

道は山中湖畔にそつていた。い
やでも湖畔に遊ぶ多勢の、観光客

の姿が日にうつる。観光客も、我
々の姿に変な顔をしている。

△同じ夏のひと時を、遊ぶ者と修
行する者△

そう思つて、彼等を横目で見な
がら、改めて行脚の意義を、胸に
きざみなおした。

籠坂峠の手前の茶屋で中食をと
り、峠に立つたのが午後一時半。
程なく県境をえくて静岡県に入り
午後三時須走を通りぬけた。

この辺は車の通行量も多く、歩
いている者は一人もいない。走り
すぎる車の中から、ヤジる者もい
れば、ミカンの皮を投げつける者
もいる。然し我々は、ただ一心に
擊鼓唱題しながら歩きに歩いた。

宇宙衛星を飛ばし、月旅行も夢

ではなくて来た科学時代の今
日、数世紀前の古色蒼然たる行脚
姿で、テク／＼歩く者は馬鹿かも
知れない。

然し、だが然し、眞の平和は、
いずれの側にあるのだろうか。文
明を謳歌する者が人類を破壊し、

馬鹿と思われる少数の者が、立正

安國の道につらなつてゐる。

科学が人間を嘲い。嘲わるゝ宗
教が、嘲う人々に祈りを捧げてい
る。

△但行礼拝、人間礼拝、現代を救
うものは、最早この実践のほかは
ない。

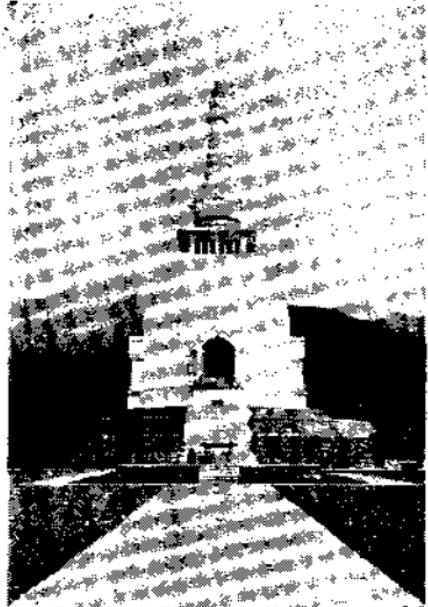
と、心に繰り返しながら歩く中

夕闇が迫つて來た。歩く足にも、
体全体にも、唱えるお題目の声に
も、疲れが出はじめた頃、ネオン
に明滅する御殿場の、町の彼方の
山腹に、夕闇に包まれながら、燐
然と輝く仏舎利塔の姿が見えて來
た。

「あれだ！ 仏舎利塔だ！」

我々は思わず叫んだ。涙が瞼に
にじんだ。足もおのずから早くな
つていた。

御殿場の街を突つ切り、箱根へ
向う国道を行くこと約一里、めざ
す仏舎利塔に着いたのは夜八時。
そこには照明に照り出されて、
夜空に浮ぶ壮大な仏舎利塔が、あ



靈峰富士に対した御殿場
仏舎利塔の威容

たかも我々の行脚を迎えるかのように屹立していた。

この仏舎利塔のドームの内には昭和三十七年の夏、鷲峰会第一回の行脚として、身延より鎌倉へ向つた際、祖廟の清流で拾い集めた一字一石の経石が、学生行脚隊によつて持參奉納されている。

また鷲峰富士に対する此の仏舎利塔の、正面本尊である金銅の釈尊像は、身延山の釈尊像を原型として、身延山よりインド王舍城鷲峰山の、仏舎利塔正面本尊として寄進された金銅の、釈尊像と寸分も違わないものもある。

身延山——富士山——鷲峰山

この三つの靈山は、今や釈尊と

法華經によつて、より固く結ばれようとしている。

「日は東より出て西に入る。日本の仏法の月氏（インド）へ返るべき瑞相なり」

大聖人のこの予言は、不斷の驚

いた。就寝十一時。
鼓宣令、但行礼拝の実践によつて實現されて行くであろう。

その夜は、仏舎利塔を監理している三徳の、社員の人々に出席され、三徳の道場に一泊させて頂いた。

御殿場より池上へ

身延山大学一年 渡辺政彦

七月三十一日 晴

渡辺政彦

つたが、今朝、夜が明けてみると宝塔を中心とした山全体が、さながら「白法の大王座」いつた感じあつた。め、仏舎利塔の周辺があつた。

どんな風光なのが見当もつかなか

午前九時、三徳の社員に見送ら

れて道場を出発、途中、御殿場市

内の三徳の会長堀内貞良師の実家

に立ち寄り、一泊のお礼を述べ、

その家の前から足柄街道に入った

街道は、左右どこまでもつづく

杉並木の木立ちにおよわれ、苦な

がらの面影を留めていた。

突如、物凄い夕立中に見舞われ

た。雨はたちまち小川のように街

道に洗い流れた。

身延を出てから始めてあつた雨

であるが、雨あがりの爽快さはま

た一入。然し、気は軽くとも足は

重い。連日の歩きすめで、重い石
でも引きずつているようだつた。

午後二時、足柄山の麓の竹ノ下
の部落に入った。弘安五年九月十
四日、大聖人が一泊されたのは此
の部落である。

△一泊の御靈跡は何処だろう△

聞けば上人は、部落の人々から
大へん敬慕され、高校生や中学生
までも、毎日欠さず唱題修行に來
ているという。

うお寺があり、その門前に、

「日蓮大聖人二泊の御靈跡」

という石碑が立つてゐた。

二泊というのは、文永十一年五
月十三日、身延入山の折の一泊を

も意味している。



竹ノ下常唱院大聖人宿泊記念碑の
前で右より小林・仲・渡辺の三名

と部落の中を進む中、御殿場線
足柄駅とは日と鼻の、駒沢川をへ
だてた道端に、法華宗常唱院とい

つていた。

これには驚くと共に、深く考えさせられた。通行人も稀な山間の小部落の中のお寺でさえも、指導者の真剣さと眞面目さ、そしてその熱と気迫には、毎日のように子供たちまでも集つて、唱題修行するという、この事実である。

人の雜沓している都会の寺院に青少年活動の見るべきものが少くやつているかと思えば、理論に走るか、リクレイシヨンずわりになつてゐるか、ともかく純一無雜の

信行に徹して行こうとする運動はまことに乏しい。やはり指導者の如何によるものであろう。

この日、我々は足柄峠を越える予定でいたが住職や大勢の信徒に

強く引き止められ、住職とは、もつと語りあいたい心もあつたので止められるまゝに旅装を解いた。

昭和三十七年夏の行脚の際、日高上人が竹ノ下の遺跡について、

供たちまでも集つて、唱題修行す

るという、この事実である。

それによれば、足柄街道は歴史的な古道で、当時往来も頻繁であつたが、徳川時代より箱根街道の方が盛んになつたため、すつかりさびれ、竹ノ下も寒村となつてしまつた。

大聖人が一泊された竹ノ下の宿は、鈴木繁八を先祖とする民家であつて、住来に面した板壁の、見越の松のある平屋であったという

当時、家中には、風変りな二

強く引き止められ、住職とは、もつと語りあいたい心もあつたので止められるまゝに旅装を解いた。

私のは代々婿養子。しかもその婿が、皆若死にしてしまう因襲があつて、今も母子して後家なんて相当深く調査されている。

と、前置きしながら語る二人の老婆の言をあわすれば、この家は代々竹ノ下の豪族で、この辺一帯を宰領し、終戦当時までは多くの地所や山林をもつていたといふ。

家宝としては六老僧日興上人の

腹こもりの尊像をはじめ、土地が要害であつたところから、合戦のあるたびに功を立て、武田信玄より挙手した陣羽織とか、加藤清正より頂いた御墨付き、等々の古文

人の老婆がいたのみで、

「古い家は、因縁が深いもので、

私の家は代々婿養子。しかもその

婿が、皆若死にしてしまう因縁が

あつて、今も母子して後家なんて

すよ」

書が沢山秘蔵されており、

「今では常唱院の方が、大聖人宿泊の靈跡として言いふらされてい
るが、実は常唱院の地所は、もと
／＼鈴木家の墓地であつて、今で
も墓碑研究者が驚くような、古い
珍しい墓がある。」

代々の言い伝えによれば、たま
たま大聖人が鈴木家に宿泊された
時、これを縁に、鈴木家も法華經
を信するようになり、宿泊を記念
してお題目堂を建てる時、墓地を
地所として選んだのにすぎない。
だから宿泊の靈跡は、本当は鈴木
の家の方である。

その後、お題目堂は、堂守がい
たり、いなかつたり、お堂がこわ
たり、いなかつたり、お堂がこわ

れたり、建て直したりした時代も
あつたそうだが、近年になつてお
寺の形体が整うようになり、大型
人宿泊の靈跡という記念碑も、そ
の門前に立つようになったのだ」

ということであつたという。

「だから今度、竹ノ下へついたな
ら、もう一度その家を、詳細に調
査してみるようにな……」

と、身延出発に際して、日高上
人から内示されていた。

そこで、その由を住職の中村上
人に伝えると、さつそく上人は八

方に手を尽して、その家を探され
た。然し杏として所在すら判らな
かつた。

なにぶんにも、その家には風変

りな老婆がいたというのであるか
ら、おそらく長い歳月、近所すぎ
ないもせずに、深く門を開じてい
るのかも知れない。或はまた、既
に代が変つてしまつているかも知
れない。

手の施しようもなく、その夜は
中村上人と、法門のことなど語り
あつて夜を更かした。話しお中、
最も興味深い問題は、やはり本尊
問題であつた。

八月一日 晴

法華宗特独の朝のお勤に列して
、常唱院を出発したのは朝八時。
御駕場線の足柄駅の踏切を越す
と、すぐ道は急になる。峠まで約

足柄山腹、大聖ハ小憩を記念した丈余の大宝塔

別れをつけ、擊鼓して峰へ向つた
新道と旧道とがあつたが、もちろん旧道を進んだ。

いくばくもなく渓流のそばに出た。横には南無阿弥陀仏と刻まれた一丈ばかりの宝塔があつた。



一里。

中村上人の案内で、まず常唱院の行場であるお滝に参拝。急坂を登つて尾根へ出ると、高さ一丈もある一枚岩のお題目の大宝塔が建つていた。近くに大聖人袈裟掛けの松の木があり、美しい枝ぶりをみせていたが、こゝは風光絶佳、真正面に靈峰富士の全貌が、手に

とるように望まれた。

その背、大聖人もこゝに至つて晴々しくこの展望を満喫せられ、暫し時のたつのも忘れられていた

といふ。大宝塔もこれを記念して建てられたのである。建立願主には、御殿場近在の寺院名が列記されていた。

渓流の水を水筒につめて、旧道をあえぎ／＼登りつめ、足柄峰に立つたのは午前十一時十分。山頂の聖天堂の、横の茶店で小憩し、ハイカー連に混つて中食、

これより下ること一里にして矢

倉沢、また一里にして関本の街と

なる。

午前十一時四十五分こゝを出発

一気に山をくだつて山麓の、バス

の発着点の地蔵堂、矢倉沢（落武
者部落）の入口の閑場、薺野、弘
西寺をすぎて午後二時五十分、雨
坪にしかると道端に、

「日蓮大聖人一泊の靈場」

という石碑が建つてゐた。こゝ

は日蓮宗弘行寺の入口。大聖人は
弘安五年九月十五日、池上に向わ
れる折、こゝで一泊されている。

記録によれば、関本の下田五郎
左衛門の家に泊られたことになつ
ているが、おそらく弘行寺が五郎

左衛門の邸跡であろう。

本堂の前には、大聖人の腰掛石
があり、本堂の裏の墓地の中には

大聖人の爪墓があつた。

爪墓とは珍らしいものであるが
或は一泊の折、切られた大聖人の
爪を、大切に保存し、大聖人滅後
これをお墓として建てられたもの
かも知れない。ありそなことで
もある。

なお寺宝として龍華日像七人の
マンタラ本尊、或は養珠院お万の方
が使用されたという茶盤。それ
は側面に豪華な塗絵巻が施されて
はいたが、虫に食われて余りにも
古びていた。

こうした寺宝は、日像上人やお

万の方が、大聖人の遺跡をたずね
られた折の名残りを留めるもので
あるか。

午後四時、弘行寺を辞して秦野
(はたの)へ向つた。というのは
大聖人が次に泊られた所が、平塚
の長谷川邸（今の要法寺）である
ところから、弘行寺より関本へ出
酒匂川（さかわがわ）ぞいに河口
に近い今井へ下り、そこから対岸
の酒匂へ渡り、東海道をのぼつて
平塚へ行くという路線と、もう一
つは、関本から直接酒匂川を渡つ
て松田へ出、秦野を経て平塚へ行
くという路線、この二つのコース
が考えられるが、いずれにしても

古道であり、

——この中、どちらを選ぶべきであるか——

ということになると、

——大聖人は何處で酒匂川を渡られたのか——

——大聖人は決して海岸ぞいの景色もよく、旅情も楽しむことが出来るが、曾つて文永十一年五月十二日、大聖人が身延へ向られる道中、酒匂から今井へ川越えされる時、折からの増水で、一旦舟を引き返し、その夜は酒匂の地蔵堂（今の法船寺）に泊された事実がある。

今こそ酒匂川の上流には、発電所が出来ているため、水も少くな

つてゐるが、その昔は、相当な水

力サであつたことだろう。

——私は擊鼓して道を急いだ。酒匂病体を馬上に托した旅である。

まして弘安五年九月の大聖人は

御病体を馬上に托した旅である。

酒匂川には十文字橋という橋がかゝ

つてゐた。考えぬいたコースだけ

に、この橋を渡る時は、さすがに

関本のあたりから、酒匂川を渡ら

れたのではないか、と当然考えら

れよう。

まして酒匂川は、関本と松田を

結ぶ路線より、やゝ下の方で、秦

野の方から流れて来る川音川と合

流して、川幅を広めている。

——大聖人は、おそらく関本から

酒匂川を渡つて対岸の松田へ出、

秦野を通つて平家へ向わたれたのだ

ろう

と推定したのである。

——私は擊鼓して道を急いだ。酒

匂川には十文字橋という橋がかゝ

つてゐた。考えぬいたコースだけ

に、この橋を渡る時は、さすがに

感覚無量なものがあつた。

ところが松田から、次の町の神

山につくと、また道が二つに分れ

た。一方は小田急線にそつた新し

い広い道、一方は山の中の細い

旧道、

へ山中で、日が暮れるかも知れな

い

とは案じたが、思い切つて旧道

へ向つた。

篠窪・堀庭・堀窪という山間の

小部落を縫つて、やつと平地に出
平沢の部落を経て秦野の街に入つ
たのは、既に夜の九時。

三人とも疲れ切つてクタ／＼だ
った。もう、とても平塚まで歩け
そうもない。こゝで日蓮宗のお寺
をたずねると、

「曾屋の妙法さん」

というお寺があるという。曾屋
町の妙法寺のことである。一縷の
望みをかけて門をたゞくと、庫裡
建設のため、総代世話人の会議中
だつたが、住職藤巻日恩上人に温
く迎えられ、一泊の情けをうけた
就寝十一時。

思えば九月二十六日身延を発つ
てより、富士川ぞいに山間の田道

をたどり、御坂峠、籠坂峠、そし

て今日は足柄峠を越えて此処まで
丸一週間、大聖人の足跡をたずね

歩いた苦労もさることながら、道
中、あつたこともなれば言葉を
交したこともない人々から、数々
うけた温い激励や一夜の宿、

——これひとえに大聖人の忍難慈
勝のおかげ——

と思えば、思わず溢れる感涙に
何時しか枕をぬらしていた。

八月一日 晴

朝七時、妙法寺を辞して一路平
塚へ向つた。

道は金目川にそつた坦々たる鋪
装道路。中野・下大根・青柳・南

金目・飯島という町々をすぎ、平
塚市平塚町の要法寺についたのは
午前十一時半。

こゝは弘安五年九月十六日、大
聖人が一泊された長谷川氏の屋敷
趾。境内には大聖人腰掛石が保存
されていた。

参拝している中、生職守屋上人
が出迎えられ、聞けば当山の子息
は守屋宣明上人だという。宣明上
人は、同行の小林上人の、身延高
校時代の一級後輩。今は立正大学
在学中だそうだが、そうと知つて
旧友の家に来た親しみを覚えた。

すゝめられるまゝに本堂で二時
間ばかり午睡し、午後二時、ザル
ソバの御馳走にあすかり、二時三

十分要法寺を出発、深谷の大法寺へ向つた。

然し、休憩時間が長かつたせいか、歩き出すと三人とも、足を地につけることさえ堪え難いほど、足が痛んだ。

歩き出す始め、少々足が痛むのは何時のことだが、今日ばかりは

その場でひつくり返つてしまいたりほどだつた。

見かねた守屋上人が、八幡・四ノ宮を経て相模川（さがみがわ）の「田村の渡し」まで見送つて下さつた。

「田村の渡し」それは旧道時代の舟の渡場。今は神川橋という立派な橋がかゝっている。

これを渡ると寒川町。こゝには曾つての国幣中社であつた寒川神社があり、延喜式の相模最古の社で、一ノ宮總社といへ、近在に二

ノ宮・三ノ宮・四ノ宮という分社があつて、それがそのまま地名となつてゐる。

神川橋から一ノ宮まで、普通の足取りならば、三十分もかかるまいと思われながら、痛む足では一時間半もかゝつてゐた。

こんな調子では深谷まで、到底今日中に行けたものではない。途中には、日蓮宗のお寺は一軒もなつた。

住職江藤邦文上人は、

「私も一人で長期の行脚修行をしたことがある」

と言つて、こゝろよく一泊を許された。

上人は布教院に何度も行かれ、布教活動については非常に熱心な方だつた。

その夜は遅くまで、上人の布教活動の体験談やら、今後における布教活動の在り方について御意見を伺い、得るところ少くなかった

八月三日 晴

昨夜、充分に足の治療をしたせいか、痛みは薄く、身心ともに爽快。午前七時、上人や家族の方々に見送られ、一路深谷へ向つた。

思い切り力強く擊つ太鼓の響きと共に、唱える三人のお題目の声は、道ゆく人々を驚かすほどだった。

大藏・猪郷・用田・中条・吉岡

芝原の町々をすぎて、蓼川の橋を渡れば綾瀬町の深谷。大法寺は十字街の角だつた。

住職高瀬教誓上人は身延参拝中で留守だつたが、上人夫人の語るところによれば、

——文永八年九月十一日、大聖人

が龍口の首の座をまぬがれ、佐渡

流配中、依智（今の大室市内）の

本間六郎左衛門重連の館へあすけ

れる途次、深谷の辻の淡島堂で休

息された——

ということだつた。大法寺の境

上人にうかがえば、

内には、今もこのお堂が残つていて、

——この寺は寛永二年、北山本門寺十二代の貫首日賀上人の開創す

た。

我々は、こゝで三十分間小憩し

十一時三十分大法寺を出発。次の

目的地瀬谷へと向つた。

途中、厚木飛行場のそばを通り

小田急江ノ島線の線路を横切つて

境川の橋を渡れば、そこから横浜

市戸塚区である。

午後一時十分、瀬谷町の宗川寺

に立ち寄れば、驚いたことに、こ

のお寺は鶴の紋所。

へさては創価学会のお寺に迷い込

んだかな？

と思わず立ち止つたが、そうで

と断言され、これほど心強いこ

はなく同じ日蓮宗。住職井出壽道

道である」

「弘安五年九月、大聖人が池上へ

向われた時の道は、宗川寺の前の

人の方の紋所」として「井戸に橋」を用いているのに對して、日興上人の門流では母方の紋所を用いているのだという。

なお井出上人の語るところによれば、

「弘安五年九月、大聖人が池上へ

向われた時の道は、宗川寺の前の

道である」

とはなかつた。

午後一時三十分、我々は宗川寺の前の道、確かに大聖人が通られた道を、境川にそつて北上、權戸

・本郷の町を経て、瀬谷町一ノ閑の妙光寺に午後一時四十到着。

住職藤村宣淨上人は他出中であつたが、妙光寺の縁起によれば、――こゝは奈良朝の初期、孝徳天皇の大化年間、明光比丘尼が庵を結び、釈尊像を安置して妙光庵と称していた。

降つて鎌倉時代、弘安五年九月十七日、大聖人の一行が池上へ赴

かれる途中、こゝに一泊されたことにより、当時の庵主みずから本化の大信を發して弟子となり、法号を文教院日成とたまわり、妙光

庵も連昌山妙光寺と改めた――

といふ。

スイカの御馳走に舌づつみをうち、午後三時三十分妙光寺を出発

国道一二九号線へ出て東へ進んだ

横浜市内の保土谷区を過ぎる頃

日はとつぶりと暮れた。夜八時、港北区の中山町に入り、横浜線の踏切りを渡つた。

△この辺で一夜の宿を乞いたい△

と思い、日蓮宗のお寺を尋ね尋

ねて、川和町の妙蓮寺の門前に到了た。時に夜九時。

「日本から、よその国に戦争をし

かけることはなかろうが、若し、よその国から戦争をしかけられた

とした場合、現在の日本の防衛体

と、幸い住職柳下教学上人が出で

来られ、

「遠慮なく……」

と快諾された。

ホツとして旅装をとき、風呂を頂いて汗と垢を落した。行脚中、

一番有難いと思うのは風呂である。その夜も遅くまで上人を囲んで色々有意義な話を伺つた。面白かつたことは、国土防衛問題のことだつた。

制では、二日間しか戦斗能力はない

い」

この言葉は、深く我々の肺腑をさした。我々は、あまりにも社会状勢や国家状勢、引いては国際状勢にも、うとんじすぎている。



（名ノミの淡島堂と宗祖宿泊碑

——餅屋は餅屋——

というけれど、大聖人の立正安

国の獅子吼は、蒙古襲来という恐るべき未曾有の大困難、この現実の依つて米つた根本原因と、その後の動向をみきわめた上、軍備拡張でもなければ、外交政策云々でもなく、

「汝、早く信仰の寸心を改めて、速かに実業の一善に帰せよ」

という國家諫曉だったのである

國家・世界の現実、そしてその前後をもみきわめずして、如何に

信仰を鼓吹しても、所詮、現実より遊離した宗教となり、社会を救うには、ほど遠いものとならざるを得ないだろう。

このたびの身延・池上間の行脚

の目的の一つには、蒙古襲来といふ大困難の後に来る国家状勢の変動をみきわめ、未来に対する正法宣布の対策を具体化せんとする大

聖人の、その心底にあれようと期するところがあつたのではないかと思つた時、これまで、

——疲れた、足が痛い。もう歩けない——

——今夜の宿は、どうしようか。

泊めてくれるところがあればいいが——

と、自分の肉体ばかりに心が傾いていたことが、懲愧に堪えなかつた。

八月四日 晴

今日は最終コース、最後の行脚である。昨夜の反省を、もう一度心にかみしめ、仏天に祈り、大聖

人に詫びながら、大音声にお題目を唱えて、一路池上へ向つた。

葛根・星谷・勝田町・大堀町・東山田町・野川・千年という町々を通り、南武線の鉄道を越え、小杉町に入つて多摩川の「丸子の渡し」についたのは午前十時。

人間の決心といふものは恐しいもので、ここまで一気に歩いていた。

弘安五年九月十八日、大聖人の一行が「丸子の渡し」についた時

池上左衛門ノ太夫宗仲・宗長の兄

弟をはじめ、四条金吾・荏原義宗等々鎌倉一円の擅越たちが、急報によつて出迎えていたであろうと

いう。

九ヶ年の間、身延の山中、一步も出さずに困難を折つておられた大聖人が、困難後はじめて山を下つて関東へ来られるとあれば、急使をうけた関東の弟子・擅越たちが武藏の国と相模の国の国ざかい、威儀にみちていた。

この「丸子の渡し」の河原に、土

下座・合掌して出迎えていたこと

であろうとは、容易に想像されよう。

「知法思國」

という大聖人のお言葉が、海軍元師東郷平八郎の健筆によつて刻み込まれていた。

当時、この渡しは舟で渡つた。

今は丸子橋という大橋がかゝつて

いる。

我々は、橋を渡つて洗足池へ向つた。到着したのは午前十一時。

池の淵には大聖人の大銅像が立つていて。

が馬から降りて暫し、この池の淵で休息され、足を洗われたことから、洗足という地名が起きて来たのだという。またこの池は古來一度もかれたことがないという。

こゝからは、池の水面を通して対岸の、妙福寺の瓦と、これをおもう大聖人袈裟掛の松とが望まれたが、湖上ボートに遊ぶ者、湖畔に散歩する人々は多くても、この銅像をおがむ者は一人もいなかつた。

悲しみと怒りに似た思いをしながら、銅像の下で弁当を使い、午前十一時三十分洗足池を出発。更に大音声のお題目を張りあげて、池上本門寺へと南下した。

伝えるところによれば、大聖人が池上宗仲の館に到着されたのは九月十八日の午の刻、今の午後一時であつたという。

奇しくも我々一行が、宗仲の館跡である大坊の前に立つのは、月日こそ違え、同じ一時のことだつた。こゝ大坊には、大聖人御入滅の居間がある。居間の中央には、大聖人が病弱をよりかけながら、立正安國論を最後の説法として説かれたという大黒柱が、昔のまゝ黒光りに光つて安置されていた。

我々は、その前にひれ伏した。頭はあげられなかつた。

「只今……身延山から只今……到着いたしました」

と心で報告し、同時に唱えるお題目の声もわなゝいていた。

その後、大聖人の荼毘塔に参拝し、坂を登つて本門寺の、新築したばかりの、見あげるような大本堂の前に到つた時、佐々木妙定法尼とその信徒の一行が、手に手に太鼓をうちつて、我々を出迎えていた。それは我々の行脚の、最後の一歩を飾る天鼓であつた。

一緒に本堂へ上り、国宝大聖人の尊像の御開扉をして頂き、直ちに身延山の法主猊下をはじめ、道中お世話をなつた各寺院・各信徒の家々に対して、無事到着を知らせる感謝の電報を打つた。

その夜は、本門寺の特別の計ら



最後の説法として立正安國論を講ぜられてより、十月十三日の御入滅に先立つて、年十四才になる経一暦（後の龍華日像上人）に対して、京都開教を付嘱されると共に、御自身の墓を身延山に建てるなどを固く御遺言されている。

いで、客殿の一間に旅装をといたが、三人とも真黒に日焼けした上はくぼみ、頬はこけ落ちて、着ていた衣も袈裟も、白衣も手巾・脚絆も、汗と埃で、まるで醤油に煮しめたようになつていて。思えば七月二十六日身延山を発足してより八月四日の今日のまで丸十日間、本妙庵の学生僧が三人、互に兄となり弟となり、励ま

しあい助けあいながら、歩きに歩き通して來たが、今こゝに無事到着を喜びあうよりも寧ろ、長い道中、多くの人々の情けをうけながら、その時その場で、これに応じるほどの説法の一つも出来なかつた身の未熟さ・青臭さが反省され

火をかゝぐべく、あえて病禱をしてまでも、身延山から池上まで進まれた、その間の内観的結論であつたといえよう。

大聖人は池上宗仲の館において

いな、こうした大聖人の内観と

その準備は、弘安四年の夏、蒙古

の第一の襲来の去つた直後、十間
四面の身延山久遠寺建立をされる
時から、既に始まつていたともい
われよう。

従つて大聖人の御入滅が、たど
え池上でなかつたとしても、
たとい、いすくにて死に候と
も、九ヶ年の間、心安く法華
経を誦詠し奉り候山なれば、

墓をば身延山に立てさせ給え
未来際までも心は身延山に住
むべく候。

日蓮が弟子檀那等は、この山
を本として参るべし。これ則
ち靈山の契りなり。

という結論には、変りはなかつ

たと言えるのである。

大型人は骨を身延山に留め、身
延山中より、末法万年の國の行く
末、人類の行く末を見護ろうとさ
れた。と同時に國家政權の、鎌倉

より京都へ移ることを予期されて
經一磨に京都開教を付嘱された。
我々は、その身延山より付嘱の
地池上に來つた。そしてここで我

々は何の付嘱を受けたのか。
と思つて自分自身をぶりかえつ
てみれば、高邁なるものは何一つ
なく、行脚中、心暖く迎えてくれ
た世の人々に対する限りなき感謝
と、身の未熟を恥じる深い懺悔；
…そういう小さな平凡なことばかり
りであつた。

余 錄

広島原爆の地に立つ

仲 清 蔵

昭和四十年八月六日は広島上空
において、人類史上はじめて原爆

の投下された悲しむべき二十周年
記念日である。

我々は、今度の行脚中、御駿場

の仏舎利塔を出発した頃から、

——若し八月四日に池上本門寺へ

着いたならば、そのまま長驅して

広島原爆記念平和大会に参列した

い——

と念願していた。

幸いにも予定通り、四日の午後
池上に着くことが出来た。そこで
さつそく身延の本妙庵に、日高上
人あて、

——池上から直接広島へ行つてよ
いかどうか——

と相談の電報を打つた。すると

折り返して

——ます——道念堅固に、充分健
康には注意して行くように——

という快諾の返電があつた。三

人は手を取りあつて喜んだ。

翌八月五日の朝のお勤め後、

本門寺を辞して直ちに東京駅につ

いてみれば、休暇で行く人、帰る
人で物凄い混雑、どの列車も超満
員だつた。

それでも九時から延々たる列を
つくつて、十二時三十分発「雲仙
西海」号の長崎行急行列車に席を
とることが出来た。

列車が広島駅についたのは、六
日の午前二時十九分。真夜中であ
る。駅の待合室も人で一杯。腰か

ける所もない。おそらく原爆記念

日の式典を待機している人々であ
らう。

やむなく、

——市内の何處かの日蓮宗の、お
寺の本堂の軒の下でもかりて、一
時やすませてもらおう——

ということになり、寂靜まつた
人気もない街の中を、日蓮宗のお
寺をさがしながら歩き廻つた。

然し何ぶんにも広島は、二人と
つては初めて来た街、皆目見当も
つかなかつた。かれこれ三十分も
歩いたろうか、尾長町に国前寺と
いうお寺があつた。そうと本堂へ
上り、軒下の廊下で、そのまま仮
眠。

夜が明けて、住職疋田英政上人
に挨拶すると、上人は身延山大学
教授疋田英翠先生の実兄であると

判り、急に親しみを覚えた。

上人も我々が身延山の学生であると知つて、なつかしげに色々と接待されながら、原爆記念式典の大要を説明された。

それによると、式典は、午前七時半より始まることになつていた。もう時間的余裕はない。上人はハイヤーで我々を、市の中央にある平和公園へ案内された。到着したのは正七時。

まのあたり初めて見る爆心地の建物の数々……無惨な原爆ドーム公園中央の埴輪式総合慰靈塔、そ

してこれを中心として、公園の周間に点在する小慰靈塔の群、その中には、いたいなき子供ばかり

の、靈を合祭した塔もあつた。

既に廣場には、数千人の參会者がつめかけていた。ボオーアイスカウトの一団が、整然として交通整理に當つていた。

あたりには、戰争に対する激しい怒りと悲しみを秘めた空氣と、

平和に対する沸るような折りと願いをこめた空氣とが、圧縮された厚い層となつて立ちこめていた。我々三人は、ありつけの声をはり上げて、お題目を唱え、ありつけの力をふるつて、太鼓をうつた。

△原爆犠牲者よ、安らかにおやすみ下さい。一度とあやまちはおかしませんから』

と、慰靈塔に刻まれた碑文のまゝを析りにこめて……。

まもなく、後から後からつめかかる各県遺族団体や、宗教団体、各種団体、一般參会者等によつてさしも広い平和公園は一杯になつてしまつた。

その中で、ところなく各個につ太鼓の音がして、然し我々の擊つ尺三の太鼓は、たとえ僅か三丁であつても、あたかも百雷の響きとなつて、大会場の隅々に轟いていた。

午前七時三十分、しめやかに式典が開催された。廣島県知事・広島市長・總理大臣(代理)等々のメツセーシが朗讀され、少年合唱

團による「広島平和の歌」が齊唱された。

時に八時十五分、原爆犠牲者の冥福を祈る鐘の音が、ジヨウ／＼として鳴り渡つた。

幾千万の参会者は、一齊に黙祷を捧げた。それは厳肅な黙祷だった。会場セキとして声なく、打ち鳴らす鐘の音は、限りなく胸の奥にしみ渡り、とゞめなく溢れる涙は、頬をぬらした。前でも後でも右にも左にも、忍び泣く声、嗚咽歎哭の声が洩れていた。

天はあたかも、二十年前のこの日を悲しむかのように、低くたれこめた雨雲の中に、わずかな薄日をさしていた。

八時三十分式典は終了した。それから一般焼香。我々は再びトウ／＼として繰返した。中央慰靈塔の前へと進む人波は我々の前で左右に分れた。その中を我々は、肅々と進んだ。間もなく物凄い台風が広島に上陸、暴風雨となつた。

後で聞いた話しあるが、この

式典に、御殿場仏舎利塔の山主堀内貞良師も参列していた。堀内師は、その時の我々の印象を、次のように語つていたという。

「式典中、一般焼香が始まつた時

突如、物凄い太鼓の轟きが起つた嚴肅な黙祷のあとだつただけに、百人も千人の人が、一気に撃ち出されたような轟音だつた。

何処の団体だろうと思つて、ふりかえつてみると、わずかに三人

然し、墨染の衣に手甲脚絆、網代笠をかぶつて太鼓を撃ち、三人一列にならんで人波の中を、堂々と進む姿は、本当にたのもしかつた

何處の僧堂だろうと思つて、眼をこらしてみると、太鼓には皆、

「一妙無象・蘇生万象」と書かれしており、胸にかけている頭陀袋には、「身延山」という字が読めたので、すつかり有難くなつてしまつた。

身延山の学生が行脚姿で、原爆の広島に来たということは、たゞそれだけでも、誠に素晴らしいこと

「言はかはない」

なお余談ではあるが、式典終了

後、我々は市内山根町にある老人ホーム寿老園を訪ねた。

こゝには、鷺峰会第一期生の武村浩司先輩がいる。武村先輩は、亡き父親のあとをついでお母さんと共に、この養老院の経営に当つていた。

武村先輩もお母さんも、我々の突如の訪問、久しぶりの再会、しかも台風にすぶぬれになつた行脚姿に、びっくりするやら、小踊りして喜びやら、大騒ぎだつた。

その夜、寿老園をあげて歓迎会が開かれたが、こゝの老人たちは我々の行脚姿をたとえようもなく懐しがつっていた。

というのは、実は昭和三十九年

の五月二十五日より四十六日間、

鷺峰会第一期生の沢田覚泉先輩をはじめて同期の三人が、九州熊本の本妙寺から身延山まで、数百里もある道中を踏破した時、その道中、

同じ行脚姿で、この家に泊したことがあつたからである。

老人の中には、先輩の行脚姿に接して、法華經信仰を啓發された人も少なくはなかつた。

思えば、我々若輩の学生には、布教らしい布教は、何一つとして出来ない。たゞひたすらに大聖人のあとにつゞく門下の一人として燃え沸る立正安國の祈りを、墨染の衣に手甲脚絆、撃ちならず太鼓

と、唱えるお題目に托して、但信

口唱して行くばかりである。

翌朝、老人ホームの二階の窓を開けると、日と鼻の裏山の山頂に

建設中の、口本山の仏舍利塔が仰がれた。

これを仰ぐと、池上行脚中の御

殿場伝舍利塔を思い出す。あの仏舍利塔の対する富士山の彼方にはなつかしい身延山がある。帰心は矢の如くであつた。

頌 春

新春を迎え読者皆々様の御清昌を衷心より
御祝辞申上げます。

鷲峰誌も誕生以来満三才を迎えました。これ
れひとえに読者皆々様の御丹誠・御愛育の
たまものと感謝申上ます。

今後とも一層の御指導、御支援をお願い申
上げます。

鷲 峰 編 集 部
醒 悟 園 本 妙 庵
代表 日 高 白 象



新春九州街頭布教予告

新春二月下旬から三月上旬にかけて九州福岡・
熊本・大分の三県下各都市において果敢なる街頭
布教が展開されます。

★福岡県 二月二十二日より二十六日まで五日間

★熊本県 三月一日より三日まで三日間

★大分県 三月五日より九日まで五日間

なお福岡・熊本の両県下には本妙庵より日高・

沢田・小林の三師が随喜参加し、大分県下には三
月四日より春休みに入る身延山大学高校の学生有
志十数名が、身延山布教別動隊として西下、先発
の日高師一行と合流します。

かくして身延山の玄題旗と法鼓は、全国津々浦
々に宗風を宣揚し、やがて遠く海外までも推し進
められて、広宣流布の大願を遂行していくことで
あります。

内案習学講習会延山青年行

昭和四十一年度春季身延山青年行学講習会は日蓮聖人の教えと他宗の教えとを比較検討する講義を中心として、左の通り実施されることとなり参加者を募集しています

時 三月二十六日より二十九日まで

所 身延山西谷信行道場

講題と講師

日蓮聖人と念佛

岩間湛良先生

日蓮聖人と禅

疋田英翠先生

日蓮聖人と真言

日高白象先生

日蓮聖人と創価学会

長谷川寛慶先生

日蓮聖人とキリスト教

堀一勇先生

日蓮聖人と根本仏教

望月海淑先生

会費 宿泊代二千五百円、写真代百五十円

米一升（代金可）

申込 身延山布教部あて

内案研修學園悟醒

春季身延山青年行学講習会開催に先き立ち醒悟園本妙庵において行学研修会が開かれます。

期間 三月二十二日より二十五日まで
宿泊 本妙庵（会費不要）寝具の用意あります。

講題

一、日蓮聖人の本尊観（特に本仏論）

一、日蓮聖人の唱題実践道

一、日蓮聖人の國家觀

参加自由、但し定員十名まで

なお四泊四日間中の一日は身延沿線内船の倉ヶ平の滝山（日諦上人の滝）で滝修行しますので水着を用意すること。

本妙庵の道順は身延駅よりハイヤーで波木井の日新製材横の遠藤喜男宅下車。この家に荷物をあずけて山を登ること。

編集後記

鷲峰 正月号

昭和四十一年 第四卷 第二十六号
通巻

定価 五十円 送料 十四

昭和四十一年一月五日 印刷
昭和四十一年一月十日 発行

編集兼发行人

山梨県身延町波木井 醒悟園本妙

日高白

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷

発行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷲峰

振替(甲府)二〇三番会所

誌代

半年分 三六〇円 (送付共)

一年分 七二〇円 (送付共)

一年分 三〇〇〇円 (送付共)

★月並みな言葉であるが「一年の計は年頭にあり」という。そこで年頭正月号の「巻頭の言葉」として「鷲峰会の目的とその使命」と題し、その概要を公開してみた★これは重大な発表であり、鷲峰会が発足し、本誌を創刊してより九三ヶ年の間、反対に反撃を重ねながら、あらゆる角度より、その実現の可能性とか、その公開の時機、等々を充分に検討しつけて来たものである★蓋し、これは仏滅以来三千年、仏滅以来七百年來、一圓浮揚内未留有の大事業であり、百年の計をもつてからねばならない一大仏事である★然し、如何にこゝに仏祖の悲願があるならば、そして仏祖の悲願が空しからざれば、我等が如説修行するところ、如何に至難な大業であろうとも、必ずや実現されて行くことであろう★問題はかかる人材を五人十人、乃至數十人と養成せんとするに當つて、まず足もとより必ずや三障四魔、三類の強敵が憤然として競い起つて来るといふことである★法華經の勧持品二十行の偈文は厳然として生きている。魔の兵衆は必ず殺到する。年頭これを覺悟して鷲峰会の目的と使命を公開したのである。